

地蔵の来訪

岩崎雅彦

地蔵菩薩は平安時代以来、観音と並んで庶民信仰の盛んな仏である。地蔵は菩薩の中でも、瓔珞で身を飾る他の仏たちとは違い、衣を纏った僧侶の姿をしている。如来や他の菩薩が人間を超越した威厳ある姿なのに対して、僧形の地蔵は人間と同じ姿で表される。古くから人々は、地蔵を自分たちに近い存在として親しみを感じ信仰してきたのである。

そもそも地蔵がこうした姿を取るのにはわけがある。地蔵は未来仏である弥勒菩薩が出現するまでの無仏の時代に、六道の衆生を救済するため釈迦如来によって遣わされた仏である。人間に交わって直接救うことを使命とする地蔵は、それゆえ僧形という人間に近い姿で現れるのである。

地蔵は手に錫杖を持つ行脚の僧の姿を取るのが基本的な形である。地蔵は六道能化の仏として衆生済度のために歩き回り、時には地獄にまで出向いて人々を救う。地蔵は言わば《歩く仏》である。峠や辻、村境など、路傍に石地蔵が祀られるのは、地蔵のそうした性格

が、交通を守る道祖神の信仰と結びついたものである。

『宇治拾遺物語』第十六話「尼、地蔵見奉る事」は、「地蔵菩薩は、暁ごとにありき給ふ」ということを仄聞した尼が、地蔵を拝もうと毎朝あたりを歩き回り、生身の地蔵に出会うという話である。

『梁塵秘抄』二八三番歌にも

わが身は罪業重くして 終には泥犁へ入りなんぞ 入りぬべし
依羅陀山なる地蔵こそ 毎日の暁に必ず来たりて訪うたまへ

とあって、地蔵が毎朝、居所の依羅陀山から地獄を訪れ罪人を救うことを詠んでいる。

また『梁塵秘抄』四三七番歌には

法師博奕の様がるは 地蔵よ迦旃二郎寺主とか 尾張や伊勢のみみず新発意 無下に悪きは鶏足房

と、法師姿の博奕打ちの名を列挙する中に、「地蔵」という名が見える。同三六五番歌にわが子は二十になりぬらん 博奕してこ

そ歩くなれ 国々の博覚に
さすがに子なれば僧かなし 負かいたまふな 王子の住吉西宮

と、国々を渡り歩く博奕打ちの生熊が詠まれているが、法師博奕が歩く仏である「地蔵」の名を名乗るのも、偶然とばかりは言い切れない。

地蔵はまた、人の住まいを訪れることもある。『宝物集』巻四には、次のような話が見える。京都の東山あたりに住む女がいた。この女は近くの六波羅の地蔵に常に参詣していた。母が亡くなるが、埋葬を依頼する当てもなく、途方に暮れて泣いていると、夕暮れに僧が一人やって来てわけを尋ねる。女が事情を説明すると、僧は「やすき事にこそ待るなれ」と言い、遺体を背負って出て行った。その後この僧はかき消すように見えなくなつた。女は、これは地蔵のなされたことであろうと思ひ、六波羅へ参ると、果たして地蔵の足には土が付いていた。それからこの地蔵を「山送りの地蔵」と呼ぶようになった。

御伽草子の「狐の草紙」(大東急記念文庫蔵)でも地蔵が訪れる。僧都が女を見初め恋文を出す。すぐに返事が来て僧都は女の屋敷に招かれる。僧都はこの屋敷で女と暮らすことになり、年月が過ぎる。

かかりけるほどに、僧都、思ふことなく、女房とたはぶれゐたるところに、門の方に人のあまた音しければ、見やりた

るに、若き僧の錫杖持ちたるが、三、四人走り入りたり。

これを見て、あるじの女房をはじめて、ありつる者ども、我先にと逃げ走る。僧都あさましくて、逃ぐる人々を見れば、老いたるも若きも狐になりて、みな四方へ走り失せにけり。

屋敷と思つていたのは「こんがうしやういん(金剛証院)」という寺の大床の下で、七年ほどと思つた年月は、わずか七日の内であつた。末尾に

昔も今も地蔵の御本誓、ありがたくこそ覚へける。

と記されていることから、錫杖を持つて屋敷に走り込んできた若い僧たちが、実は地蔵菩薩であつたことが知られる。美女に化けて僧都をたぶらかしていた狐たちは、地蔵によつて正体を見顯され、逃げて行つた。

狂言「地蔵舞」では、宿を借りた旅の僧(シテ)が亭主(アド)と二人で酒宴となり、僧が地蔵舞を舞う。

地蔵舞を見まいな、地蔵舞を見まいな。

地蔵の住む所は、迦羅陀山に安養界、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天に夜摩・都率天、二十五有を廻つて、罪の深き衆生を、錫杖を取り直し、かひすくうては、ほつたり、すいすくうては、ひつたり、昔釈迦大士の忉利天へ上つて御説法のおりふし、地蔵坊を召されて、かたじけな

くも如来のこがねの御手をさし上げ、地蔵坊がつむりを、三度までさすつて、善哉なれや地蔵坊、善哉なれや地蔵坊、未代の衆生を、地蔵に預けおくなりと、仰せを受けてこのかた、走り巡り候えど、(大藏流山本東本。日本古典文学大系「狂言集」所収。一部表記を改めた)

このように、舞の謡の前半では、釈迦から衆生済度を付託された地蔵菩薩が、六道を廻つて救ふことを述べる。ここまでは地蔵の行動を客観的に描写しているように取れるが、これに続く部分では、

誰やの人が憐れみて、茶の一服もくれざれば、くたびれ果つるお地蔵、このお座敷へ参りて、(中略)飲うだれば、糍の花が目上がり、左へはよろよろ、右の方へはよろよろ、よろよろとよろめけば、慈悲の涙せきあえず、衣の袖を顔にあて、衣の袖を顔にあてて、六道の地蔵の、酔泣きしたをごろうぜ、酔泣きしたをごろうぜ、

と、僧が自分自身を地蔵に見立てて、その行動を述べている。謡の前半では客観的な描写と思わせておきながら、実は冒頭からすべて、僧が地蔵の立場で謡つていたということが、途中から判明する趣向である。

なお天正狂言本「地蔵坊」では、僧は「諸国一見の地蔵房」と名乗る。謡は簡略で
地蔵房と申すは、く、諸国を巡るく

とて、これなるお檀那に一夜の宿を借りにける。

と始まり、

錫杖を杖に突き、わが寺指して帰りけり、
く。(適宜表記を改めた)

と終わる。現行の形のように、地蔵の経歴や職務についての叙述はなく、「地蔵舞」の語もない。

狂言「地蔵舞」の僧は、自らを地蔵に見立て軽妙に舞を舞う。この曲で、一夜の宿を借りた僧がこうした行動をする背景には、地蔵が僧の姿で訪れるという説話の存在があつた。

洒脱さと、宗教的味わいを残してこの曲は終わる。舞台にはしみじみとした独特の余韻が漂う。「地蔵舞」の僧は、来訪する僧体の地蔵に自らを重ね、地蔵を演じる。この僧は、説話に見えるような地蔵の化身ではない。あくまで現実の人間である。作品の理解としてはそれが正しいと言える。しかし一方で、「ひよつとしたら実は本物の地蔵菩薩だったのではないか」と思わせる雰囲気、この曲にはある。その理由は、一つには訪れた僧が実は地蔵であつたという説話の存在であり、また地蔵が人間に身近な仏として信仰されてきた長い歴史があつたからに他ならない。この狂言の上演記録に、曲名を「地蔵菩薩」とした例がある(『弘前藩日記』)のも、象徴的である。(國學院大學非常勤講師)